

追悼のことば

震災の日5歳の私と母と兄の3人は2階建の神戸母子寮の建物の1階で生活していました。

地震で建物が倒壊して私は生き埋めになっており、知らない人たちが私を助け出してくれて、靴を渡してくれました。

母はその時すでに死んでおり、兄は無事でした。

震災後、2人は父親のもとに引き取られたのですが、私だけが児童養護施設に預けられました。

その日から私と家族との時計の針は止まりました。

施設で過ごしている間、父からの連絡があったのですが金銭を要求するので金子理事長が私のことを守っていてくれました。

私が18歳になる頃、父は家で孤独死していました。父とはほとんど会話することはありませんでした。

高校を卒業後、金子理事長の勧めもあり大学に進学しました。

その頃の私はすでに自分の中で家族とのつながりを切っており、心は何も感じなくなっていました。

それは私がこれからの人生を自分一人の力で生きていかなければいけないと気が付きそう決めたからです。

当時の私はとても怖かったのです。

1人でこのまま人生が終わっていくような気がして。

そうはなりたくない怖さが私の唯一のエネルギーでした。
生きるためではなく死にたくないから
勉強する、トレーニングをする、バイトをするそんな毎日でした。
自分で手にする何かをがむしゃらに探していました。

そうでないと不安で眠れないような日々でした。

そんな毎日を過ごしていくうちに私は当時母子寮の職員であった
岡本先生から母の形見と手紙を受け取りました。

手紙には、震災の後に私と父とを引き離してしまって
ごめんなさいと書かれていました。

母がよく私を膝の上に抱っこしていて
私はこの子がいるから大丈夫とよく言ってくれていたと。

寂しい時は鏡を見て笑ってごらん
ゆうちゃんの顔はお母さんそっくりだよと書かれていました。

この時私は初めて母に愛されていたのだと実感できました。

私はその当時先生に会うことができませんでした。
かすかに先生の記憶を覚えており、すごく自分にとって良い方
だと感じてはいたのですがどうしても自分の中で会うことができなかったのです。

当時の私は生きるためだけに必死で、誰も私の心の中に入ることができなかったの
です。

大学では自分の恩師となる先生と出会い、
社会に出てからも仕事の域を超えて相談できる人たちも増えていき本当に助けて
いただきました。

私はこのような経験を経て初めて困った時に人に素直に頼ることができたのです。

困った時に助けてほしいと素直に言える。

このことが人に感謝をするきっかけになりました。

助けていただいたからこそ困った時に自分ができる何かをしてあげたいと
本当に素直に思えるようになったのです。

このような人間関係が本当に自分にとって大切だと
思い始めてきました。

そして私は3年前岡本先生から私に会いたいと手紙をいただきました。

その時私は岡本先生から今まで私のことを心配してもらっていたことに
初めて気づき感謝しました。

そして心から岡本先生に会いたいと思えました。

先生と再会すると本当に僕のことを心配してくれており
自分にとって大切な方だと実感しました。

そして震災当時自分が住んでいた地域のことも教えてくれました。

私は自分の家族のルーツを探しはじめました。

その途中でも多くの方々との出会いがあり、初めて自分の親戚に出会うことができました。

親戚に、私にはもう1人の異父の兄がいることも

知らされてもう1人の兄とも会いました。

異父の兄は母の墓に連れて行ってくれました。

私は初めて母の墓に行くことができました。

岡本先生はずっと私の実の兄のことも心配しており

兄のことについても話をしてくれました。

兄は私に何もしてあげられなかったことに対して責任を感じており、
今更どのような顔をしてあえば良いのかが分からないと
自分は兄として私に会う資格がないと
泣きながら岡本先生に電話をしたそうです。

私は人に感謝をすることを感じて生活していくうちに
震災があって兄が苦労したことも自然とわかるようになってきました。

兄も実の母を亡くし、悲しい中あまり育児が得意でない父と一緒に暮らしていて苦
労して当たり前だったと。

そんな中でも私に対して責任をずっと感じて今まで生きてきたのだと
思いました。

私は兄に会いたいと思い始めました。

それは兄に幸せで生きていってほしいと伝えたいからです。

私に何もできなかったことを悔いて生きて欲しくない。
胸を張って幸せに生きてほしい。これは私からしか兄に伝えることができないと思
いました。

私は兄の居場所を探しはじめました。
そして多くの方の情報提供のおかげで兄の居場所がわかりました。

私は兄に会いに行く前に金子理事長に相談しました。

金子理事長は言いました。

自分の中で抜けている家族の時間を埋めることはこれからの自分の人生を豊かにしてくれる。今の自分なら困った時に頼れる人もいるから自信を持って会いに行ってきたなさいと。

この言葉に本当に励まされました。

私は先月兄と再会しました。

私が兄に伝えたかったメッセージを伝えることができました。

兄は会いに来てくれて本当にありがとうと言ってくれました。

兄はとても優しく責任感の強い方でした。

今日1月17日私は初めて兄と一緒に母の墓参りに行きます。

29年前止まった私の家族の時間が今日やっと動き始めます。

ここまで私が生きてこられたのは本当に多くの方に支えられお世話になったからです。

今まで29年間私を見守ってくれた神戸実業学院の金子理事長をはじめ職員の方々、私の先輩後輩達ほんとにありがとうございます。

今まで私と兄のことを心配してくれた
岡本先生本当にありがとうございます。

震災の日名前もわかりませんが私を瓦礫から救い出してくれた方々
本当にありがとうございました。

あの日靴を差し出してくれた女性の方
本当にありがとうございました。

ここでは名前をあげることはできませんがそれ以外の本当に多くの方々にもお世話になりました。ありがとうございます。

よく聞かれたことがあります。
あの時震災が無かったらどうなっていたかと

私は震災で大切な母を失いました。しかし、震災の後に多くの素晴らしい方々に出会い支えてこられてきたことも事実です。

私は今の自分がすごく好きです。
それは自分の人生にとって何が大切かを心から感じて日々生きているからです。

周りに支えてくれる人たちがいる。
そしてその人達に感謝をして、何か少しでも恩返しをしていくために生きていく。

私にできることは何か？
自分が経験した震災のことを伝えて1人でも元気になってくれる方が
いたらと思い今日この場所に立たせていただきました。

これからも私の人生で嬉しいこと、悲しいこと、辛いことなどが
沢山あると思います。
そこで新たに出会っていく人たちに感謝をして日々生きていきたいと強く思っています。

今日はこの寒い中長時間私の話を最後まで聞いていただき皆様
本当にありがとうございました。

令和6年（2024年）1月17日
鈴木 佑一